

## 研究主題「人間の力を超えたものに対する畏敬の念を育てる道徳の時間の 指導の工夫 —児童の感覚に働きかける資料の活用を中心に—

東京都教職員研修センター研修部専門研修課  
板橋区立新河岸小学校 教諭 石澤夕紀子

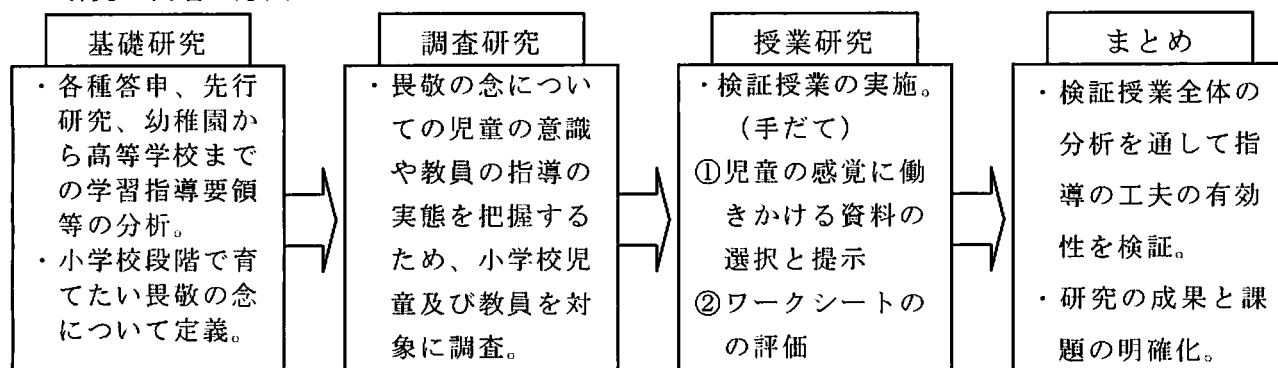
### I 研究のねらい

物が豊富な反面、人や生き物、自然とのかかわりが不足した環境で育った子どもたちには、人間の力を超えたものに対して畏敬の念を感じ、人間としての在り方を深く見つめ直す機会が少ない。人間の力を超えたものを大切にしたいという意識が育たず、深く考えずに自他の生命や自然等の尊ぶべきものを傷つけたり、粗末に扱ったりしてしまうことが懸念される。

小学校学習指導要領解説道徳編では、児童に人間の力を超えたものに対する畏敬の念を育てることが求められている。しかし、畏敬の念は児童自身が直接体験の中から様々に感じ取る、感覚的な要素が大きい。道徳の時間においては、それら児童の体験を生かしながら、読み物資料を中心として畏敬の念にかかわる道徳的実践力の指導をしているが、体験の違いや読解力の差などもあり、読み物資料中心では畏敬の念を認識することが難しい。

そこで、資料の有効性を一層高めるよう、児童の感覚に働きかける活用の仕方に焦点を当て、本研究主題を設定した。

### II 研究の内容と方法



### III 研究の結果と考察

#### 1 基礎研究

##### (1) 指導の系統性

〔幼稚園教育要領及び学習指導要領に示された畏敬の念にかかわる記述〕

幼稚園	自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
小学校低学年	美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。
小学校中学年	美しいものや気高いものに感動する心をもつ。
小学校高学年	美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。
中学校	自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。

学習指導要領等を見ると、幼稚園から発達段階に応じて系統的に畏敬の念を身に付けられるようねらいが示されている。大きさや美しさ、不思議さなどに気付く、すがすがしい心をもつ、感動する心をもつ、と指導の内容は発展していき、小学校高学年で初めて畏敬の念をもつところまで指導する。小学校高学年での指導内容はこの後の、中学校の畏敬の念の指導へと発展するための重要な基礎となる。

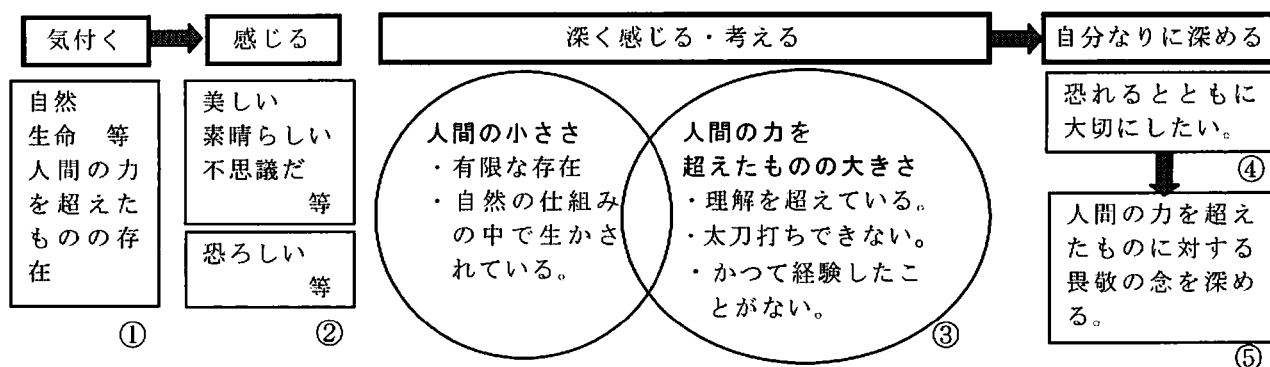
## (2) 畏敬の念とは

「畏」は、畏れることである。人間の理解を超えている、あるいは太刀打ちできない、またはかつて経験したことがない対象等に対して、恐れを感じ、近付けない状態であるととらえた。

「敬」は、尊ぶことであり、重んじて大切に扱うことであるととらえた。そこで、畏敬の念を、「恐れるとともに、大切にすること」と定義した。

## (3) 児童の畏敬の念が育つ過程

(1) (2)を踏まえ、児童の畏敬の念が育つ過程を下図のように考えた。



人間の力を超えたものの存在に気付く①の段階から、対象に関心をもち、感じ考える②～④の過程を通して、⑤の畏敬の念をもつ。前述の指導の系統性を踏まえると、幼稚園段階では①、小学校低・中学年では②～③を目標としたい。また高学年としては③～④を目標とし、中学校で求められている⑤へとつながる基礎を育てたい。

また畏敬の念をもつことは、自然や生命といった人間の力を超えたものに対する感謝や尊敬の念、敬虔な心、謙虚な姿勢を生む。このことが、自他の生命をかけたえのないものとして大切にしている心情をはぐくむと同時に、「人として世の中で果たすべき使命感に目覚める」「人間としての意味ある生き方を問う」などの、人間としての在り方を深く見つめ直す機会につながるようにしたいと考えた。

## 2 調査研究

<p>〔目的〕 畏敬の念についての児童の意識や教員の指導の実態の把握                  〔実施時期〕 平成17年7月                      〔対象〕 板橋区立小学校第5, 6学年児童375名、教員118名</p>	
児童調査結果と考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>人間の力を超えたものとして、自然と生命に対する児童の意識を調査した。                      (自然に対して) 不思議だ…85%    すごいな…94%    怖い…49%    感動する…54%                      (生命に対して) 不思議だ…91%    すごいな…85%    怖い…40%    感動する…36%</li> <li>人間の力を超えた自然や生命に対して、ほとんどの児童が「不思議だ」「すごいな」と感じている。道徳の時間ではそれをさらに掘り下げ、畏敬の念まで感じられるような指導の工夫が必要である。</li> <li>自然に対して感動した経験について具体的に調べたところ、児童は見たり、聞いたり、かいだり、触ったりして感覚を働かせたときに、その大きさ、迫力、美しさ、生きていることなどに驚いたり感動したり、快さや安らぎを感じたりすることがわかった。児童の感動には感覚が大きく影響している。感覚に働きかける資料の活用の有効性が期待される。</li> </ul>
教員調査結果と考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>日常の児童の様子を「畏敬の念をもつ」という内容項目からみた場合、半数の教員が満足できないと感じている。</li> <li>授業については8割の教員が授業を進めることに難しさを感じ、畏敬の念を扱う資料が使いにくいと思っている教員や、畏敬の念の対象がわかりにくいと感じている教員ほど授業の進めにくさを感じていることがわかった。畏敬の念の対象が明快で、授業で扱いやすい資料の活用が必要である。</li> <li>畏敬の念という概念のとらえやすさを感じた教員は4%に過ぎず、96%の教員が「畏敬の念」という概念のとらえにくさを感じている。畏敬の念の概念がとらえられないと、授業のねらいも曖昧になってしまうので、畏敬の念の明確な定義が必要であると考えた。</li> </ul>

### 3 検証授業

基礎研究、調査研究をふまえ、児童の畏敬の念が育つ過程を下表の4段階にまとめた。これを用いて児童の実態を把握し、指導の過程で学習状況を評価することにより、適切な支援を行えるようにした。また、①児童の感覚に働きかける資料の選択と提示 ②ワークシートの評価を中心に検証授業を実施した。

〔児童に育てたい「畏敬の念」段階表〕

D気付く	人間の力を超えたものの存在に気付いている。
C感じる	人間の力を超えたものに対して「美しい」「素晴らしい」「不思議だ」「恐ろしい」等と感じている。
B深く感じる ・考える	[人間の小ささを感じている。] ・有限な存在                      ・自然の仕組みの中で生かされている存在 [人間の力を超えたものの大きさを感じている。] ・理解を超えている。      ・太刀打ちできない。 ・かつて経験したことがない。
A自分なりに深める	人間の力を超えたものを恐れるとともに大切にしたい。

#### (1) 児童の感覚に働きかけるための指導の工夫

##### ① 児童の感覚に働きかける資料の選択や提示

- ・人間の力では到底かなわないという思いや、人間は有限な存在であり、自然の仕組みの中で生かされていることへの自覚がもてるような資料の選択。(例「クジラがくれた力」)
- ・人知や想像の範囲を超えた自然現象や事象、空間を目の当たりにしたときの不思議さ、恐ろしさ、美しさが感じられる資料の選択。(例「うちゅうを見たよ!」)
- ・単一の資料の活用ではなく、読み物、映像(動画、写真)音声、実物等複数を組み合わせた資料提示。(例;宇宙から見えるオーロラの美しさや不思議さが伝わる動画等)

##### ② 「畏敬の念」段階表を活用した評価

- ・ワークシートに記入する時間を十分に確保することに留意し、文章として表現することにより、児童に、感じた瞬間の自分の心をより深く見つめさせ、考えさせる。前述の段階表を活用し、ワークシートの記述をもとに、児童がどの程度畏敬の念を認識することができたかを把握する。児童の状況に応じて適切に支援を行うとともに、その変容を評価する。

#### (2) 検証授業の結果と考察

〔第5学年 主題名「宇宙の摂理への畏敬の念」資料名「うちゅうを見たよ!」〕

手立て	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宇宙飛行士、毛利衛氏の体験を通して、宇宙から見た地球という大きな視点から、宇宙の大きな仕組み、果てしない広がり、無限性、美しさ、感動が伝わる資料「宇宙をみたよ!」の活用。</li> <li>・イメージを膨らませるため、宇宙の動画、オーロラの動画を提示。</li> <li>・BGMの活用。</li> <li>・資料をOHC(教材提示装置)で拡大しながら提示。</li> </ul>
児童の記述	<p><b>D気付く</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・宇宙はとても広く、とても暗くて、いつも広がり続けている。</li> </ul> <p><b>C感じる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どんな暗闇よりももっと暗くてしんとだまっている宇宙は怖い。</li> <li>・本や映像できれいなオーロラを見たとき、毛利さんが思ったことや感じたことが少しだけわかったような気がした。言葉では表せないくらいに感動したと思う。</li> </ul>

児童の記述	<p><b>B 深く感じる・考える</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自然は大きい。自然の力はきっと無限で、愚かなことをしている人間を、いつかはきっと戒めるだろうな、と恐ろしくなった。人はなんてちっぽけなんだろう。</li> <li>・地球だって、人間から見ればはるかに大きいのに、宇宙から見た地球なんて小さくて、宇宙はかなり大きいからびっくりした。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートに、ねらいとする価値にかかわる記述がされていない児童には、机間指導の際に、より想像が膨らむよう、資料をどうとらえたかを問い返すなどの言葉がけをした。また、授業後には再度考えるきっかけとなるようなコメントを与えた。D段階の児童には、気付いた対象についてどう感じたのかを記述するよう促し、自分の心を見つめさせた。本資料では、C段階の記述をした児童が半数だったので、B段階まで感じられるような説話をして補充した。このような支援や、友達の意見を聞くことを通して、7名の畏敬の念に関する記述の段階が一步進んだ。</li> <li>・感覚に働きかける資料提示により、宇宙の現象の神秘的な美しさを感じていた。</li> </ul>

〔第5学年 主題名「自然への畏敬の念」 資料名「クジラがくれた力」〕

手立て	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クジラの命を尊ぶ村人の姿や、クジラの肉と農作物との物々交換の姿を通して人の生命、生き物の生命、自然の恵みに思いが及ぶ資料「クジラがくれた力」の活用。</li> <li>・泳ぐクジラの動画と捕獲されたクジラの写真を対比して提示。</li> <li>・資料をOHCで拡大しながら提示。</li> </ul>
児童の記述	<p><b>D 気付く</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まだ生きられるクジラと農作物との交換は、命の交換だな、と思った。</li> </ul> <p><b>C 感じる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クジラを殺したり、それを食べたりしているからかわいそうだった。</li> <li>・クジラの話で残酷なところがあったので、恐かった。</li> </ul> <p><b>B 深く感じる・考える</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自然は人間が生きられるようにしてくれている。</li> <li>・今まで自分が食べてきた物は、これからも生きられるのに食料になってくれていた。</li> <li>・人間がクジラを食べられるのは、人間が強いからでも偉いわけでもなく、命をもらっただけのことだから、人間は思い上がってはいけない。</li> <li>・自然が魚を作り、自然が森を作り、自然は命をも作り出す。自分の親もその親も自然が作った物を食べているから、命は自然を通してつながっている。</li> </ul> <p><b>A 自分なりに深める</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生きていくために魚などを食べていくのは仕方ないと今まで思っていたけど、僕たちが食べるから死んでいくと考えた今、一つ一つ感謝して食べていきたい。</li> </ul>
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートではB段階の記述をした児童が半数を占めていた。また、学習過程における言葉がけなどの支援や、友達の意見を聞いたあとで、畏敬の念に関する記述の段階が一步進んだ児童が5人いた。</li> <li>・自由記述の感想にB段階と評価できる深く考えた内容が多かった。</li> </ul>

#### IV 研究の成果と今後の課題

##### 1 研究の成果

- ・畏敬の念を育てるための資料選択の工夫を行い、検証授業を通して有効性が確認できた。
- ・映像（動画、写真）、音声、実物等複数を組み合わせて資料を提示し、児童の感覚に働きかける手だてにより、児童が人間の力を超えたものに対してより深く感じ、考える姿が見られた。
- ・畏敬の念が育つ過程を、段階表として示し、段階を常に意識してワークシートを分析した。児童が感じ考えた畏敬の念の段階をより正確に把握し、学習状況に応じて適切な支援を行ったり、変容を確認したりすることができた。

##### 2 今後の課題

「海は美しい反面荒れると怖い」といった対比関係があるときに、児童は感じたり考えたりしやすい様子が見られたため、こうした要素を内包した資料を活用した指導事例の開発。